

# 町史

とっておきの話

253

東洋大学講師

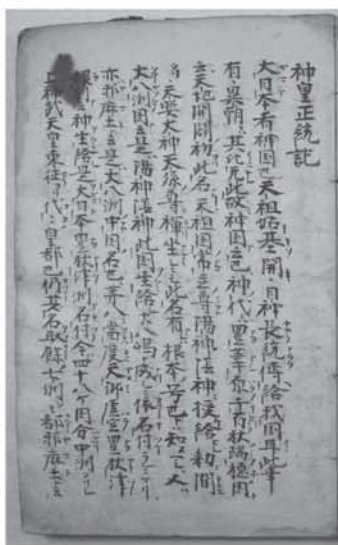
久野 俊彦

## 黒谷で発見された『神皇正統記』

原田家に残った『神皇正統記』

黒谷の原田拓夫家は、江戸時代には医者を営んでいました。医者は知識人としてさまざまな文化活動をしており、原田家には多くの蔵書が伝えられてきました。私は現在、原田家伝来の書物について書誌学的調査を行っています。

その過程で、原田家に伝存した『神皇正統記』は、天正十五（一五八七）年に書写された貴重な書物であることが判明しました。『神皇正統記』は、南北朝時代の史論書で、北畠親房が延元四（暦応二・一三二九）年に常陸国小田城で書いた書物です。



▲只見本神皇正統記の奥書

### 美しい装訂と文字

只見本『神皇正統記』の装訂（綴じ方）は、綴葉装といいい、江戸時代の本でよく見かける袋綴（和綴本）とは違って見かけが異なります。

葉装は、数枚の紙を重ねて二つ折りにして一括りとし、数括りの折り目の部分を糸で綴じ合わせたものです。綴葉装は、中世の和歌や物語の書物に見られ、厚めの紙に表裏の両面に書かれました。只見本『神皇正統記』は、表紙・題簽（題名の部分）や絹の綴じ糸などが、装訂された当時のままの状態を保っています。さらに、全体が揃っていて破損がほとんどありません。安土桃山時代の美しい書物の姿がここにありまます。これは、もう美術品といってもいい書物です。厚めの紙の表裏に、半丁（一頁）ごとに九行で、名詞・動詞を端正な楷書の漢字で大きく書き、助詞の片仮名が小さく書かれています。この表記法を宣命書といいますが、只見本の片仮名は、中世の特徴をよく示しています。『神皇正統記』の原本は、宣命書で書かれたという説があり、原本の推定に只見本が役立つ可能性があります。

### 只見本『神皇正統記』の読み方

漢字で書かれた古典文学は、



▲綴葉装とよばれる中世の綴じ方

写本に振り仮名が書かれていない場合が多く、漢字を訓読みするか、音読みするかを判断する問題があります。『神皇正統記』は、漢字と片仮名または平仮名で書かれており、ほとんどの漢字を訓読みで読むのが一般的です。一方、只見本『神皇正統記』には、多くの漢字に振り仮名が付されていて、漢字の音読みと訓読みを指示する符号（音合符・訓合符）も付されています。これが『神皇正統記』が成立した南北朝時代十四世紀の読み方なのか、只見本を書写した天正期十六世紀の読み方なのかは、今後の課題ですが、古典文学や国語学の研究において重要な問題提起をしています。